

東京X総会で植村会長ら役員全員再任、「TOKYOX物語」出版



TOKYO X Association (植村光一郎会長) は29日、八王子市内のホテルで平成29年度総会を開催し、提出3議案を承認するとともに任期満了となった役員改選で植村会長、道下泰治副会長および理事5人を再任した。

開会のあいさつで植村会長は「昨年はPEDの影響もあり東京Xの出荷は8383頭にとどまったが、今期は9千頭の出荷を旨とする。東京オリンピック・パラリンピックに向けて増頭に取り組んでいる。輸入豚肉は国内品の代替商品だったが、今日では輸入豚肉も良質なものを輸出してきており販売競争が激化している。このため東京Xも安全・安心・動物福祉、生産工程の情報発信など輸入豚に負けないよう取り組んでいる。今後はインバウンド需要で、外食向けに従来のセット販売から、部分肉販売にも取り組みたい」と述べた。

来賓では清水孝治東京都議会議員が「オリンピックを前に東京を世界で一番にとの目標で、どのようなおもてなしができるのか。東京Xがその商品に入るよう種豚改良や畜産試験場の予算増額などに取り組んでいる。小池知事も東京Xを支援してくれることを願っている」と述べた。また、日本畜産物輸出促進協議会の菱沼毅理事長は「日本の畜産物を海外に売り出そうと取り組んでいるが、植村会長の力なくては、海外輸出も認められないほどお世話になっている。トリュフはトリュフだといわれるように、東京Xも世界の中で独自性を出してブランド商品として売り出していく時期だ」と、中央畜産会の南波利昭副会長も「国内だけでなく輸出に向けた取り組みの意欲を感じるとともに、海外でもこのような豚肉を食べたことがないと言う期待が膨らむ」と、日本養豚協会の倉本寿夫専務は「養豚協会もTPP11などへの対策を含めてチェックオフ制度の法制化やトントン自助金の提唱などに取り組んでいる」とあいさつ。また東京Xの20周年を記念して「TOKYOX物語」の出版・販売を通じたブランディング戦略の内容も披露された。

総会後の記念講演・対談(植村会長、本間コーディネーター)では、北海道で放牧豚肉生産に取り組んでいる(株)マノスの平林英明代表が「おいしい豚肉づくりは、豚が元気で幸せに暮らしていなければならぬ」と題して、自ら取り組んでいる「どろぶた」について紹介した。どろぶたは、平林代表が実践するエルパソ牧場で放牧肥育8カ月、出荷時体重160kgで生産された豚で、かぼちゃやサイレージ、木炭給餌で生産された豚だ。よく遊び、よく食べて、よく寝る豚で、どろんこ遊びが大好きで、ビタミンとミネラルを含んだ土が栄養素となり、豚特有のくさみを大幅に抑え肉質と味を変え、オレイン酸も豊富(45%以上)な豚肉に仕上がっている。なお、恒例の生活者・関係者交流会には約200人が参加して東京X、バスク豚、どろぶたがローストや生ハムで提供されそれぞれ好評だった。